第三回西宮文学案内

「アニメ『涼宮ハルヒ』 の聖地と西宮」

日　時：2010 年 11 月 23 日（火）
14 時 00 分～15 時 30 分
場　所：西宮市大学交流センター大講義室

作家　土居　豊

あらためまして、講師の土居豊と申します。よろしくお願いします。今日は、西宮文学案内第三回「アニメ『涼宮ハルヒ』 の聖地と西宮」ということでお話させていただきます。西宮北口駅前にある珈琲屋ドリーム（注：『涼宮ハルヒの憂鬱』アニメシリーズに登場）から徒歩３分ぐらいの好立地でやらせていただくのは大変意義深いことだと思っています。

早速、話に入っていきたいと思います。今日はこのようなワークシートを用意していますので、それを片手にお付き合いいただければと思います。

最初に話に入る前に皆さんにカミングアウトしなければならないことがあります。この場で「アニメ『涼宮ハルヒ』 の聖地と西宮」と言いながら偉そうに話をしようとしているのですが、実は、『涼宮ハルヒ』初心者です。そのことを最初にちょっとお断りしておきます。ふざけんなと言って帰られては困りますが、最初に申し訳ありませんということでおわびしておきます。初心者といっても、何をもって初心者というのか自分でもよく分かりませんが、私にとっての『涼宮ハルヒ』体験は、深夜に、いわゆる第二次放映のときにちらっと見たのが最初です。そこで、ぐっとはまって全部見ていたらよかったんですが、諸事情により全部見なかったので、あまり話はよく分かっていませんでした。

そのあと今年の冬に『涼宮ハルヒの消失』という映画作品になって公開されたときに、ほとんど予備知識なしに映画館に行って見て、それではまってしまったんですね。それで

はまることができたというところがわれながら自慢なんですが、『涼宮ハルヒ』ってなんだという状態で、テレビシリーズのことを知らないまま映画を見て、そこではまってしまったという、そういう『涼宮ハルヒ』初心者です。

さて、それではおこがましいことながら、『涼宮ハルヒ』ビギナーである私、『涼宮ハルヒ』歴１年未満の私がお話をさせていただきます。アニメ『涼宮ハルヒ』シリーズを監督された石原立也さん、演出の山本寛さんといった方々は年代的には私よりちょっと下ぐらいです。生まれ落ちたときから、普通に身の回りにアニメがありました。アニメファンであろうとなかろうと、テレビをつけたら放送しているという環境でしたので普通に見ていました。それが中学生ぐらいから、アニメをだんだん見なくなる。そのままアニメを卒業してしまうか、あるいはだらだらと見続けるか、その辺が分かれ目だと思います。私なんかはだらだら見ていた方ですね。

それではワークシートをご覧ください。円形にそれぞれ項目を書いています。上から行くと、アニオタ度、時計回りにいって阪神間度、パロディ度、総合、ＳＦ度、ラノベ度と、こんなふうにぐるっと回るようになっているんですが、私が話しましたら丸を付けて、あとは線で結んでいただくような感じで進めていきたいと思います。

さっそくですが、総合というところに丸を入れておいていただけますでしょうか。総合というのは、もちろん最後にまとめて話が戻ってくるところですが、最初の出発点ということで、総合からスタートさせていただきます。

これは今日の話のテーマであり、そして話を最後どのように結論に持っていくかというところで出発点からいきますが、まずは『涼宮ハルヒ』という世界を魅了するアニメを創り出した関西文化の底力というテーマで話を進めたいと思います。何しろ西宮文学案内ですから、結論的に西宮は関係ありませんでしたということになると具合が悪いわけです。『涼宮ハルヒ』シリーズに関しては、西宮が舞台になっているのは定説ですので、あまり

関係ないということは言えません。夢は大きくということで話を広げましたが、『涼宮ハルヒ』は究極のハイブリッドコンテンツだということで話をスタートしたいと思います。

では次に、阪神間というところに進んでください。総合からぐっと斜め上に上がりまして、阪神間というところにいきます。総合から阪神間のところにさっと線を引いておいてください。いまちょっと画面に出しました写真は、ちょっと写りが悪くて申し訳ありませんが、これは球場ですが、どこの球場かお分かりでしょうか。字がもっとくっきりと見えていれば分かると思いますが。きっとお分かりの方は大勢いると思います。西宮球場です。これは、この講座のために実家に行って、昔のアルバムからはがしてきたものです。昭和50年代、私が小学校ぐらいのときです。西宮球場に野球を見に連れて行ってもらったことが何度かありましたので、そのときにたしか撮った写真があったはずだなという記憶をたどって、実家のアルバムからちょっと1枚はがしてきたわけです。内野自由席に座っていますね。近鉄と阪急というマイナーなゲームを昼間にやっていました。そのころはプロ野球のコアなファンでもありませんでしたので、何となく父親に連れられて行ったわけです。見ての通り、いまは西宮球場がなくなって阪急西宮ガーデンズになっていますね。

さて、阪神間の懐かしい、象徴的ともいえる西宮球場の写真からスタートしまして、阪神間の青春ストーリーというところへ話を持っていきたいわけです。いまちょっと画面を変えましたが、阪神間というのは、結構、青春ネタの多い地域です。なぜ多いかというと、あまり大きな声では言えませんが、やっぱり神戸があるからじゃないでしょうか。つまり、関西で青春ストーリーをつくるときに、なんか神戸って入れたくなるんですよね。一応デートスポットでもあるし、六甲山から夜景を見たり、遊覧船コンチェルトに乗ったりして、なんか恋愛のシチュエーションが盛り上がってきそうな道具が揃っている。そうすると、当然、道中に阪神間を通ったり、おしゃれなカフェに行ってしゃべったり、そんな感じになってきます。というわけで阪神間は青春ストーリーに非常に馴染みやすいわけです。

阪神間を描いた代表的な青春ものというと、世界的に読まれている村上春樹の小説であ

ったり、いまの若い方は読まないかもしれませんが、宮本輝も阪神間を舞台にした青春ものをいくつか書いてますし、映画化されたものもあります。阪神間を舞台にした青春ストーリーは数多く書かれていて、馴染みやすいのはたしかだと思います。アニメで阪神間が青春ストーリーとして書かれていて、そしてその風景が非常に美しく描かれているというところが一つ『涼宮ハルヒ』という作品の魅力になってくるのではないかというのが最初に私のお伝えしたいことです。

ところで、いま映している画像はあまり『涼宮ハルヒ』と関係ありませんが、これは何かというと、失われた阪神間の風景を描いたものです。そういうところへ話を持っていきたいわけです。ちなみに左の写真は私が撮ったものですが、これは神戸のメリケン波止場にある震災メモリアルパークといって、阪神・淡路大震災のときに壊れた埠頭を記念に保存しているところです。右の写真は、岡本にある谷崎潤一郎ゆかりの屋敷ですが、震災で壊れたあとに保存運動が起こっていたのですが、予算的に無理だということで断念したということをニュースで聞きました。このように放っておいたらどんどん失われていく風景というものがあるんですね。

『涼宮ハルヒ』の場合にも、阪急西宮北口駅前の広場がアニメにずばりと描かれています。主人公たちが待ち合わせをする場所です。もう見たら、どこからどう見ても西北の駅前の広場だったんですが、取り壊されてしまい、いま工事中です。まさかそんなに有名なアニメの舞台になるとは思わなかったので、先に計画が進行したんだろうと思いますが、放っておいたら風景というのはこのようにどんどん変わっていってしまうということです。もちろん映画のなかに、フィルムに焼き付けられて保存されるということはあります。アニメもそうです。先ほどの西宮北口駅前の公園広場はもうすでに見ることはできませんが、アニメのなかに永遠に保存されたと考えることができるわけです。

さて、ちょっと阪神間の話で引っ張りますが、私はアニメ『けいおん！』の第一期は見ていなくて、第二期から見出したくちなんですが、皆さん、『けいおん！』をご存じですか？

人気アニメで、女子高生のガールズバンド、つまり軽音楽部のバンドのお話です。『けいおん！』は、神戸女学院と同じくヴォーリズ建築で有名な滋賀県の豊郷小学校の校舎でロケをして、高校の校舎としてアニメのなかに登場するという凝ったつくりをしています。

余談ですが、神戸女学院の学生さんにこのあいだ話を聞きましたら、『けいおん！』を最初に見たときは、あ、女学院でロケしていると思ったんだそうです。廊下の様子ですとか、窓の形が神戸女学院を彷彿させるので、最初は女学院かと思ったら豊郷小学校だったと。ヴォーリズ建築に共通するデザインというのは、見たら同じに見えてしまうくらい個性的なんだなと思いました。アニメに描かれているのは豊郷小学校だということです。ただ、この『けいおん！』というアニメの舞台は、おそらく関西ではないと思われます。絵だけ、あるいは風景だけ借りているわけです。京都の郊外の景色などをたくさんロケして、背景、土地として描いているわけです。修学旅行で京都に行っていますので、これはどう見ても関西の学校ではないだろう、おそらく関東地方が舞台だろうということです。

一方、『涼宮ハルヒ』の場合は間違いなく関西、それも阪神間だと思われます。谷川流の原作小説には、アニメと違ってはっきりとした地名は出てきませんが、アニメは誰がどう見ても西宮だと分かるけれど、原作には西宮という地名は出てきません。でも、阪神間だなということが分かるんですね。舞台になっているまちの描写をご紹介します。私の下手な朗読ですが。

「周辺地域に住む人間が、街に出る、といえばたいていこの辺りのことを指す。私鉄やＪＲのターミナルがごちゃごちゃと連なり、デパートや複合建築物が建ち並ぶ日本有数の地方都市」（谷川流『涼宮ハルヒの憂鬱』角川書店刊より）

というのが出てくるんですね。主人公たちが出かけたまちを「日本有数の地方都市」といっていますが、これはおそらく大阪か名古屋か、横浜かそのへんだろうということが分かります。横浜は地方とはいえませんから違いますね。そして、私鉄やＪＲのターミナルがごちゃごちゃと重なっているというのも、名古屋、大阪のどちらにも私鉄のターミナル駅

がありますので、どっちかなということになるんですが、決定的なのはこれです。これも実家のアルバムからはがしてきた写真ですが、阪神対広島という、マイナーなデーゲームを小学校のときに見にいったときの写真です。自分は忘れているんですけどね。小学校ぐらいのときには結構連れて行ってくれていたんだなと、親に感謝しているわけですが。原作の小説のなかに甲子園球場の話が出てきます。もちろん甲子園球場とは書いてありませんが、お客が５万人入ると書いてあるんですね。地方都市にあって、お客が５万人入る球場というのは甲子園しかありません。東京ドームには５万人入りますが、東京ですからね。ですから、原作もやっぱりこれは阪神間だということは明らかなわけです。そのような阪神間の風景を、原作もアニメもたくみに使ってお話を進めていきます。

ここでいろいろご紹介したい例があります。アニメには西宮の風景をふんだんに取り入れていますが、でもよく見ると、そのままではないということに地元の方は気が付くと思います。例えば、主人公たちは西北の駅前の広場で待ち合わせてから市内探索の任務を遂行するわけですが、すぐに行くところが夙川の河川敷なんですね。徒歩で行ったことになっていますが、実際、西北の駅前から徒歩で夙川に行くことはありませんので、そのへんちょっとデフォルメされています。そのあとに行く図書館も、西北駅前のアクタの図書館ではなくて、中央図書館という設定になっていますので、それもぐっとデフォルメされています。そのような例はいくつかあるわけですが、西宮のいろんなきれいなところ、使い勝手のよさそうなところが、商店街は実は尼崎なんですが、ぎゅっとデフォルメされて登場しています。

こうした手法は、実は文学ではよく使われます。例えば、村上春樹の小説に出てくる阪神間のまちも阪神間そのままではなくて、芦屋を中心として位置関係はかなりデフォルメされていますし、また、ちょっとこれは話し出すと長くなりますが、例えば、フォークナーというアメリカの作家は南部を舞台にした壮大な連作を書くわけですが、南部のいろいろな土地をぎゅっとデフォルメして合体させたような架空のヨクナパトーファ郡という名

前のところを舞台としています。また、私の師匠にあたる小川国夫という作家は、静岡県の大井川の流域をメインの舞台として連作を書くわけですが、それを小川さんの場合は、フォークナーに倣ってそうしたということですが、架空の骨洲という変わった地名の場所にしてみたりするわけです。

「アニメ『涼宮ハルヒ』 の聖地と西宮」というタイトルの関係上、ちょっと阪神間の話が長くなって申し訳ありません。『涼宮ハルヒ』のなかに出てくる西宮というのは、かなりデフォルメされています。名前もアニメの方では夙川が「祝川」になっていたり、甲陽園が「光陽園」になっていたりしますが、見る人が見たら明らかに西宮だと分かります。『涼宮ハルヒ』世界の架空の西宮という感じで描かれています。ご興味があれば、ぜひ一度アニメ上でご覧ください。

阪神間のことはここで一旦切り上げまして、次にラノベの方にいきたいと思います。ワークシートの阪神間からラノベの方に線を引いていただきたいと思います。

先ほど紹介しました『涼宮ハルヒの憂鬱』という、こういう文庫本サイズでイラストの付いている若者向けのストーリーになっている小説をライトノベル、略してラノベといいます。『涼宮ハルヒ』シリーズに関しては、谷川流さんに直接おうかがいしたいところなんですが、なかなかおもてに出ていらっしゃいませんので、私はまだお会いしたことがないんですが、どうでしょうか、珈琲屋ドリームでずっと張っていたら来られるんでしょうか。そのへん、ちょっと事情を知らないんですが、アニメのなかに出てくる喫茶店は原作者、谷川流さんのよく行かれた喫茶店だということですね。

ちょっと脱線しますが、私にとって西宮北口というのは、小さいころに西宮球場に来ていたというのは別にしても、わりとなじみのある場所です。つい最近まで、西北近辺の某学習塾で講師をしていたこともあります。珈琲屋ドリームはアニメ『涼宮ハルヒ』で見る以前に知っていたんですが、ああ、これか、みたいな感じで、アニメを見てすぐに分かりました。

谷川流の文章は、ご本人は否定されるかもしれませんが、明らかに村上春樹をリスペクトしている、村上春樹を意識した文体だなということが分かります。いま話題の『ノルウェイの森』の本を写真に撮ってきましたが、『ノルウェイの森』は、語りがワタナベという一人の青年の語りで、一人称で一人の視点で語っています。基本的には三角関係を描いています。『涼宮ハルヒの憂鬱』では、基本的に主人公の男子高校生、キョンくんというあだ名の人が一人語りでストーリーを進めていくわけです。

かなり強引に話を考えると、キョンくんがワタナベの位置にあって、涼宮ハルヒともう一人の長門有希が『ノルウェイの森』の直子と緑の関係になっていると強引に結び付けることもできるぐらい文体は非常よく似ています。そして、ストーリー的にも共通するところは非常にたくさんあるんですが、そのへんのところは追々お話ししたいと思います。

それでは、村上春樹の文体と谷川流の文体を比べて、どのあたりが似ているかということをいくつか考えていきたいと思います。まず、『涼宮ハルヒ』のストーリーというのは、例えば、意識しない三角関係であったり、それから主人公プラス語り手のキョンくんが事件に巻き込まれていく展開が常に基本となっていますが、村上春樹の場合も同じく、語り手兼主人公の少年や青年が事件に巻き込まれていくというタイプのストーリーです。これは完全にハードボイルド小説が原型になっています。ハードボイルド小説は必ず主人公の探偵が事件に巻き込まれていくという話です。

村上春樹の小説はほとんどハードボイルドのパターンを踏襲していますが、やっぱり『涼宮ハルヒ』も考えようによっては、ハードボイルドストーリーをなぞっていると考えられないこともない。文体そのものもそうですが、最大の特徴は、明らかにこれは村上春樹を意識したとしか思えないのですが、主人公語りのキョンくんが「やれやれ」という言葉をたびたび発します。「やれやれ」というのは、もう村上春樹の台詞の代名詞的に使われる、引用される言葉で、これは知らないで使っているとは思えないんですね。使う以上は、当然、村上春樹が連想されることは覚悟の上でやっているんじゃないかなと思います。です

から、このあたりはちょっとやはり作者の谷川流さんにぜひ聞いてみたいなと思っているところです。

ライトノベルそのものは、実際にお読みいただくしかしようがありませんが、この『涼宮ハルヒの憂鬱』を例にとりますと、だいたい基本は Boy meets girl というパターンです。つまり少年と少女が出会う。運命的な相手と出会って、いろいろあって、最後恋に落ちる、あるいはめでたく結ばれるみたいなそういうものを Boy meets girl ストーリーというわけですが、『涼宮ハルヒの憂鬱』、最初の１巻は完璧にその Boy meets girl のパターンを踏襲しています。ご存じだとは思いますが、『涼宮ハルヒの憂鬱』の原作は、スニーカー大賞という角川書店のライトノベルの賞の 2003 年度受賞作です。これが最初に単行本になりました。いまではシリーズになっていますが、お話としては『涼宮ハルヒの憂鬱』１巻だけでも十分完結しているわけです。いろいろあって、最後に運命的な相手と出会ったんだなということをにおわせて終わっていますので、これで完璧な Boy meets girl といえます。

村上春樹の小説というのも、いってしまえば Boy meets girl ばかりなんですね。昨年から今年にかけて社会現象になった『１Ｑ８４』という小説も、いろいろ難しいことを書いてはいますが、筋を単純にしてしまえば、あの主人公のヒーローとヒロイン２人が最後出会ってどうなるかみたいなそういう Boy meets girl をちょっといろんな筋を交えて書いているなと思います。

村上春樹の短編小説を映画化した『100 パーセントの女の子』と『パン屋襲撃』もまさに Boy meets girl のストーリーで、そして『１Ｑ８４』の主人公２人とよく似たシチュエーションです。運命的に巡り会って、そして一旦別れて、そして再会するはずが再会しそこねてしまうストーリーです。もし興味があれば、ぜひ読んでいただきたいと思います。再会し損ねるストーリーになっていますけれども、それはそれで Boy meets girl です。

今日は、これを言うと分かってくださるお客さまが多いと思っていますが、最近見た深夜アニメに『Angel Beats！』というものがありました。『Angel Beats！』のラストがまさ

に映画『100パーセントの女の子』とほとんどそのままじゃないかというぐらい似ていました。『Angel Beats！』の方は、気付いたなというところで終わるんですね。あのへん、ちょっとにくい演出ですが、村上春樹の『100パーセントの女の子』の方は気付かずに通りすぎてしまう。そういうあたりが非常によく似ていました。もしご興味あればまた原作の短編もお読みいただければと思います。そんなわけで、村上春樹のストーリーとライトノベルの『涼宮ハルヒ』の似通ったところをいくつかピックアップしてお話しました。

そこで、次はラノベから総合へ戻ります。なぜかというと、あとでその理由は明らかになりますが、いっぺんラノベ度から総合へ線を戻してください。そうしないと完成しないので無理矢理そうしているんですが、総合へ引っ張ってもらいまして、そこで『涼宮ハルヒ』は究極のハイブリッドコンテンツだということを引っ張って、そしてつまり村上春樹の『１Ｑ８４』みたいに重層的な作品世界を描いているんだという、そういうもう一つの定義を引っ付けました。

さあ、それはどういうことかというと、『涼宮ハルヒの憂鬱』は、一見かなりお気楽なちょっとＳＦ系の学園アニメなんですが、ものすごく隠しネタが多いんですね。アニオタ度の高い人ほど、隠しネタに気が付いてにやっとする確率が高いのではないかと思います。私も小さいころから習慣的にアニメを見てきた人間ですので、隠しネタのいくつかに思わず笑ってしまいました。例えば、最初に流していたオーケストラの曲はアニメ『涼宮ハルヒの憂鬱』の「射手座の日」というエピソードのなかでゲームのBGMとして使われています。流していたのはショスタコービッチというソ連の作曲家の『交響曲第７番レニングラード』という、非常に重いテーマの名作交響曲なのですが、それがパソコンのゲームの電子音になって流れているので笑ってしまいました。元ネタを知っていると、めちゃくちゃ笑ってしまうようなパロディ的な要素が非常に強い作品でもあります。元ネタを知っているほど面白いというのは、たしかにいえることだと思います。しかし、もし元ネタが分からなくても、それはそれできっと楽しめるはずです。私自身も、ぽーんと間が空いていま

して、例えば、『フルメタル・パニック！』でしょうか、ちょうどゼロ年代アニメといわれるあたりを見ていないんですね。90年代あたりもちょっとアニメから離れていたこともあって、90年代の『エヴァンゲリオン』が最後ぐらいでしょうか。ぽんと間が抜けたんですが、それはそれで楽しむことができます。

ふと深夜にテレビをつけたらアニメをやっていて、ついつい見始めたのが『灼眼のシャナ』です。見始めたのが運の尽きだったのかもしれません。笑っていらっしゃる方はご存じだと思いますが、涼宮ハルヒの文庫本の表紙を書かれたのは、いとうのいぢさんという方なんですが、私は最初に『灼眼のシャナ』を見ているものですから、『涼宮ハルヒ』を見たときに、ああ、またシャナ出ているわと思ったんですね。そこでご存じの方は笑っていただけるんですが、『灼眼のシャナ』というＳＦストーリーの深夜アニメのキャラクターを描かれたのが同じく、いとうのいぢさんなんですね。シャナの顔とハルヒの顔というのはよく似ているわけです。私は先に『灼眼のシャナ』を見ていましたので、『涼宮ハルヒ』を見て似ているなと。似ているのは当然ですね。同じ人が描いていますから。そんなことでちょっとブランクがあっても楽しめるということです。

そこでちょっとパロディ度にいきたいところですが、その前に簡単にまとめておきたいと思います。『涼宮ハルヒの憂鬱』シリーズの作品の面白さというのは、いま言いましたように、知っていても面白いし、知らなくても面白い。そして明らかに計算尽くで最初からパロディ的な設定を用意しているんですね。

いまちょっと画面を出しましたが、『涼宮ハルヒ』資料集の写真をデジカメで撮ったものですが、『朝比奈みくるの冒険』という、これが深夜アニメで最初にやったときの第０話ということになっていまして、最初にこれがいきなり放映されたということです。これは涼宮ハルヒという女子高生を中心に高校生が文化祭用に映画を撮ったものの、何かめちゃくちゃしょぼい手撮りのカメラで撮った、そういうものがいきなり第０話ということで最初に流されてびっくり仰天となったということですが、これの後日談で、高校の文化祭用に

映画を撮る撮影のエピソードがずっと続いて、ああ、あれがそうかということになるんですが、ここですでにいくつかパロディというのが重なってきているんですね。

どういうことかというと、まず『涼宮ハルヒ』という作品は、もちろんフィクションですね。われわれが『涼宮ハルヒ』を見るときに、現実の私が『涼宮ハルヒ』を見る、『涼宮ハルヒ』という作品はフィクションの世界ですが、フィクションのなかでは現実の高校生活を描く、一応、リアリズムの設定です。だから、西北の駅前の風景が出てきたり、県立西宮北高が出てきたりするわけですが、リアルな学生生活を描いたストーリーであるにもかかわらず、その設定そのものは何かＳＦ的に不思議なものが出てくることになっていて、そこで現実のリアリズムの次元と違う次元がそこで出てくるんですね。そこで二重構造になっているところへもってきて、さらにその二重構造のなかの高校生がさらに映画作品を撮った『朝比奈みくるの冒険』というのを、それをアニメ作品として放送するんです。そうなると、三段階に階層が分かれたフィクションのストーリーになっていると。ものすごく凝ったつくり方をしているというのがこの一例で分かるのではないかと思います。

さて、いまちょっと階層という言葉を出ました。階層というのは、つまり１階、２階、３階の階のことなんですが、階層という言葉を使いましたのは、最近、『インセプション』というレオナルド・ディカプリオ主演の映画を見たのですが、ご覧になった方は分かると思いますが、夢のなかに進入していくというストーリーです。夢のなかで別世界、新たに別次元を創り出してしまうという、非常に凝ったＳＦ的作品になっています。『涼宮ハルヒ』と映画『インセプション』は、非常に発想が似ています。別の現実を夢のなかにつくってしまうといったところがあります。複雑に重ね合わされた、階層を重ね合わせた作品の構造になっているところがかなり通好みだと私は思っています。

さてそこで、ワークシートは次のパロディの方へいきたいと思います。いまアニオタ度のところからパロディ度のところへ右斜め下に向かって線を引っ張ってください。『涼宮ハルヒ』のパロディネタを語り出すと、おそらく私よりも皆さんのなかにもっと詳しい方が

いそうなんですが、ちょっとアニメファンとしては間にブランクのある私でも気が付くぐらいですから、ものすごくネタ満載であります。それだけではなく、最初にわざわざ音楽を流しましたのは、クラシックの好きな音楽家ファンにとってみれば、これも思わずにやっとしてしまうような曲がいっぱいでてきますので、それもパロディとしては非常に面白いわけです。

これはシリーズ２巻目の『涼宮ハルヒの溜息』という小説ですが、『朝比奈みくるの冒険』の撮影のエピソードを描いた小説、要するにネタバレ編のような感じです。文化祭に向けて映画撮影をしているところのエピソードが描かれているわけですが、谷川流さんというのは、コアな音楽ファンだろうなということがよく分かります。涼宮ハルヒはよく鼻歌を歌うんですが、その鼻歌が非常に凝っているわけです。例えば、まずオッフェンバックの『天国と地獄』という運動会でよく使われる曲がありますが、これを鼻歌で歌っているかと思えば、ロッキーのテーマを鼻歌で歌うこともあります。ロッキーのテーマは誰でも知っていますね。そうしていたかと思えば、マリリン・マンソンという歌手をご存じの方はいらっしゃるか分かりませんが、その歌手の『Rock Is Dead』という曲を鼻歌で歌っていたり、あるいはブライアン・アダムスの『18 Till I Die』のサビだけをリフレインして歌ったりと、ロックにも非常に詳しいようです。これはもちろん女子高生・涼宮ハルヒが詳しいというよりは、作者の谷川流さんが詳しいんですが。そうかと思えば、映画『ブレードランナー』のエンディングテーマを鼻歌で歌っていることもあります。『ブレードランナー』のエンディングテーマをつくったのはヴァンゲリスという映画音楽の巨匠ですが、非常にマニアックな音楽を小説のなかに使っているぐらいですので、アニメのなかにもそういうネタ的な、クラシックファンが思わずにやっとしてしまうような曲の使い方をしているあたりがいかにもパロディ度満載になっています。

そういうことを単なるお遊びでやっているかというと、そうでもない。何でそんなパロディをいっぱい持ってくるのかといいますと、さっき言いましたように、そうすることで

現実が何層にも重なってくるんです。つまりどういうことかというと、『涼宮ハルヒ』というアニメ作品、あるいはライトノベルのなかの女子高生がいますけれども、しかし、その女子高生・涼宮ハルヒというのは、ただの存在ではないわけですね。ただの存在ではないということは書いてもありますが、書いているだけではあまり説得力がない。ただ者じゃないということを表現するために、アニメ的にはいろいろ技法があるんですが、小説的にはそれを実感させる仕掛けが必要なんですね。つまり、「涼宮ハルヒはただ者じゃない」と書くよりも、つまり涼宮ハルヒがマリリン・マンソンを口ずさんでいるとか、ブレードランナーのエンディングテーマを口ずさんでいるとか、あるいは、なぜか二丁拳銃を連発で撃つときのやり方まで知っているということを書いた方が、涼宮ハルヒというのは女子高生だけれども、何かえらい物知りだなということが分かるんですね。なぜ物知りなのかは、またそれは別問題、謎になりますが、少なくともただのおちゃらけた女子高生ではないということがそれで明らかになるということです。小説的にはそういうふうなテクニックを使うわけです。

そんなふうにパロディを使うときには、何かそこにたくさんの階層を生み出したいわけです。過去のそういうのを知っているということになるんですね。例えば、涼宮ハルヒが『ブレードランナー』のエンディングテーマを歌えるのであれば、映画『ブレードランナー』をおそらく見たのだろうし、見ていなくても、ヴァンゲリスの曲を知っているということですね。そこでグッと深みが生まれるんですね。そのようにして階層を積み重ねていくやり方がここでのパロディの意味です。それはちょっと画面に出しませんでしたが、いわゆるメタフィクションというふうに言われたり、ＳＦの技法としてよく使われる、いくつも話が入れ子になっている、あるいは別の次元と平行して話が進んでいるとか、そういうふうな組み立てをするときにパロディを入れたりします。あるいは文学的には本歌取りというのもメタフィクション的な技法ですが、元の教養的知識を前提にしてさらに積み重ねていくという、そういうつくり方をしているわけですね。ですから、非常に高度な組み

立て方をしているのが『涼宮ハルヒ』シリーズです。このちゃらちゃらとした女子高生が表紙になっていますので、手に取りにくいのですが、なかなか一筋縄ではいかない作品なのはたしかです。最初に見たときに、『涼宮ハルヒの憂鬱』のもとネタには、おそらくアニメ『うる星やつら』がありそうだなという気がしていました。ちょっとそのへん、谷川流さんに話を聞かないと何ともいえませんが、どうも谷川流さんもそうですし、『涼宮ハルヒ』のクリエーターたちは、監督さんも、先ほどの山本寛さんもそうですが、わりと私と年代的にそんなに離れていないので、多分、同じようなアニメを見たくちかなということは何となく想像がつきますし、谷川流さんの原作小説のなかに出てくるネタもだいたいかぶるところがありますので、『うる星やつら』を知らないはずがないということですね。ですから、『うる星やつら』のようなものは、これは学園ＳＦものですよね。要するに、ただの学園ものではなくて、ＳＦ的設定の学園もの。これはあと知恵ですのでご参考までにいいますと、アニメ『涼宮ハルヒ』の深夜放送の第二次でしょうか、「エンドレスエイト」という、破天荒な試みをされたようで、これは僕もリアルタイムで見ていたら、もうちょっと自信を持って言えるのですが、同じエピソードが延々と繰り返し繰り返し、ちょっとだけ、ちょっとずつちょっとずつ現実から微妙に変わっているんですが、同じ時空をぐるぐる回り、一定のときになったらまた元に戻るみたいなルートをぐるぐる回っているのを実際に番組でやったという伝説的な話があります。それをリアルタイムで見たかったなと思いますが。

　要するに、簡単に言うと、「エンドレスエイト」というエピソードを見て、次の週にテレビをつけるとまた同じエピソードをやっているんですね。ちょっと微妙に変わっていますので、違うのは分かるんですが、またその次の週にまた同じエピソードをやっている、その次の週もまた同じエピソードをやっている。これは、ちょっと社会事件的な取り上げられ方をされました。「エンドレスエイト」の時空が円形に閉ざされてぐるぐる同じところを回っているような、その発想は、『うる星やつら』の映画版の２作目、『うる星やつら２　ビューティフル・ドリーマー』という、押井守監督の作品とほぼ似たような発想ですので、

おそらく意識しているなということが分かります。

　そのように非常にＳＦ的な発想のたくさん込められた『涼宮ハルヒ』なんですが、さあ、今度はそこでやっとさっきからワークシート忘れていましたが、ＳＦ度にいきましょう。つまりパロディ度からＳＦ度へいきまして、さあ、だいたい線を皆さん結んでくださっていますよね。何となく見当ついてきましたか。どうでしょう。何かどこかで見たようなかたちに最後にはなることになっています。ＳＦ作品としての涼宮ハルヒの魅力というのは、これは実はなかなか結構たいしたものなんですね。これは私の考えでは、間違いなく、谷川流さんは西宮在住で、西宮に長いこと住んでいらっしゃるので、阪神間の住人だと言えると思いますが、関西在住であればやっぱりＳＦを考えるときに神戸在住の筒井康隆や大阪生まれの小松左京などを外して考えることはなかなかできないわけですね。ちなみに眉村卓も関西の方です。

　日本のＳＦ小説というものを考えるときには、関西の問題をどこかでかまさなければ物足りないわけですが、谷川流なんかは、まさに僕が思うのは、関西発の日本ＳＦ文学の後継者になっているのではないかということです。筒井康隆が文芸誌の対談のなかで『涼宮ハルヒ』のことをちらっとほめていますね。筒井康隆は辛口な方なので、辛口というよりも毒舌ですからほめるよりも悪口を言うことの方が多いのですが、『涼宮ハルヒの消失』はなかなか面白かったらしく、ちょっとほめていました。

　『涼宮ハルヒの消失』のような、ああいう時間がぐるぐる回るものとか、パラレルワールド的なものは、筒井康隆の得意とするＳＦジュブナイズの古典である『時をかける少女』を明らかに連想させます。また、これはどうでしょうか、ご存じだったらいいのですが、最近、筒井康隆原作の『七瀬ふたたび』が映画になっています。筒井康隆のＳＦ小説で、七瀬シリーズは読心、つまり人の考えを読み取れるテレパシーを使う魅力的な女性が主人公なんですが、その筒井康隆原作の七瀬シリーズの３部作になっている３作目の『エディプスの恋人』という本がまるっきり発想としては逆・『涼宮ハルヒ』なんですね。どういう

ことかといいますと、『涼宮ハルヒ』シリーズでは、涼宮ハルヒという女の子は、自分の思った通りに世界をつくりかえちゃったらしいんですね。世界をつくりかえちゃったというか、つくりかえようとしているというか、そのへんがいま微妙なんですが、まるで神のような力を持っていて、世界を自分の思うとおりに変えてしまう、つくり直してしまう力を持っているんだということになっています。それが、『エディプスの恋人』のなかに、例えば、涼宮ハルヒがお母さんになったら、きっとこういうことをやってのけるんじゃないかという、そういう不思議な女神のような存在が出てくるんですね。あまりネタバレはしませんが、女神にはかわいい息子がいまして、かわいい息子のために何でもかんでも世界も全部変えてしまうんですね。理想の恋人もつくりだすし、要するに、かわいい息子は無敵なんですね。何か事故に遭いそうになったら車の方がどこかに飛んでいくとかね、要するに、女神に守られているわけです。涼宮ハルヒがもしお母さんになったら、何かそんなことをしちゃいそうな気がして、筒井康隆の七瀬シリーズの３作目と『涼宮ハルヒ』の発想は非常に似ているなと読んでいて思いました。そのようにいろいろ関西ＳＦを、つまりＳＦ文学を継承するような、それぐらいスケールの大きな物語を書いているということはいえると思います。

その辺でちょっとだけ作品の方にももうちょっと触れたいんですが、『涼宮ハルヒ』のこのシリーズは、いまはまだ未完です。シリーズをもしお読みになるとしたら最初の４巻はまとめて読まれるといいと思います。つまり『涼宮ハルヒの憂鬱』『涼宮ハルヒの溜息』『涼宮ハルヒの退屈』『涼宮ハルヒの消失』という、ときどき順番を間違えそうになるんですが、最初の４巻はセットで読むと、アニメシリーズとほぼ、そしてアニメ映画の『涼宮ハルヒの消失』をほぼ全部カバーしていますので、続けて読まれるといいなと思います。

つまり、最初の『涼宮ハルヒの憂鬱』で、Boy meets girl ストーリーが完成したと言いました。ところが２冊目に出た『涼宮ハルヒの溜息』では、それがまた全否定されてしまうわけなんですね。最初のところで、Boy meets girl で結ばれるはずの２人が全否定されまし

て、また振り出しに戻るようなかたちになります。また、どっちつかずのあいまいな関係風のストーリーが続きますが、そうこうするうちに、『涼宮ハルヒの退屈』という３作目に入りますと、これはいろんな短編を４つ並べたかたちになっていますが、そのなかでだんだん関係が深まっていくと。そして、映画にもなりました『涼宮ハルヒの消失』の４冊目のところでもう一度 Boy meets girl が、気持ちをお互いに何となくたしかめ合うようなかたちになって、もう一度、まだあいまいなんですが、Boy meets girl の輪が一度また閉じるということになります。ところが面白いのは、４作目では今度はもう一人いるんですね。主人公ともう一人女の子がいる。つまり『涼宮ハルヒの消失』の最後では、主人公兼語り手のキョンくんと涼宮ハルヒと長門有希という、こちらの方が人気があったりしますが、ここで三角関係が微妙にできあがってしまうような、そういうことになります。そうすると、三角関係というのは古今東西、恋愛小説のテーマですので、また先に続けられるんですね。これはちょっと作者が色気を出したかなという気が私はするんですが、シリーズにするためには、ここで結ばれてしまうと話が終わってしまいますので、三角関係をつくりあげれば、また先へ話が延びるわけですね。だから、ちょっと三角関係的なものを放り出して、先へ話を延ばしているなという気がしています。最後、どうまとめていくか非常に興味を持って見ているんですが、面白いことに、いまは『涼宮ハルヒの分裂』というところで止まっていますが、まさにいま、並行宇宙的な世界にはまりこんでいるところで終わっています。はたしてそれをどう回収するのか。はたして回収しきれるのかというのが非常に興味深いところで、その続きが非常に気になるところです。

　さあ、だんだんまとめに入っていきたいと思いますが、一つ、『涼宮ハルヒ』の小説のなかで、おやおやと思った一説がありますので、それを紹介して次に進めたいと思います。

「世界をハルヒの思うとおりに変えるより、ハルヒの内面世界を変えるほうがまだ簡単で、誰も困ることがないだろう」（谷川流『涼宮ハルヒの退屈』角川書店刊より）

という、ちょっと意味深な一節が出てきますね、これはどういうことかといいますと、世

界を変えてしまいそうな謎の強力な力を持った女の子ハルヒの内面世界を変えるほうが簡単だろうという、主人公キョンくんの一人言なわけです。これは実は、非常に大きな問題です。世界を思い通りに変えるほうが簡単か、それとも自分を変えるほうが簡単かという、実は、ちょっと哲学的な問いになっていまして、有名なアニメの『エヴァンゲリオン』シリーズも自分を変えるか、世界を変えるかという、このへんがテーマに浮上してくるわけですから、『涼宮ハルヒ』のシリーズもやっぱり自分を変えるというのは難しいということがあらわれています。世界を変えるのは難しいですけれども、だからといって自分を変えるのが簡単かというと、そんなことはないので、ハルヒの内面世界を変えることができるのかどうかみたいなことが大きなテーマになってくるわけですね。では、それは何の力によって可能かというと、この Boy meets girl1 ストーリーでは、愛の力によって変えることができるかもしれないというあたりに話がつながっていきそうです。そのような感じで、非常に哲学的な深いことも実は出てくるわけです。

さあ、そこでまたアニオタ度の方に戻ってください。線はこれで一応、どうでしょう、完成しましたか。まだ完成しないでしょうか。ここまでのことをちょっとまとめますと、『涼宮ハルヒの憂鬱』がシリーズの作品として非常に魅力的なのは、映像的にものすごく冴えている、クールであるというのは間違いないところです。制作会社の京都アニメーションが職人芸的な仕事をする会社で、ものすごく凝った映像づくりをしますので、最初にちらっとご紹介したアニメ『涼宮ハルヒの憂鬱』の「射手座の日」というパソコンゲームネタの１話だけでもものすごく凝ったアニメーションづくりになっています。本当にいろいろなネタがしこんであって、ものすごく手間がかかっています。音楽とのリンクの仕方も非常にうまいですし、「萌え」の要素をきちんと押さえてある。計算尽くで、つまり、ジャパニメーションといわれる日本のアニメの魅力の大きな要素である「萌え」というところをちゃんと抽出して、代表的なキャラクターをぽんぽんぽんと配置していますよね。

そして、もう一つ私は、実写では描けない映像、また、小説では描けない映像を強く推

したいと思います。実写で描けないというのはどういうことかというと、山本寛監督の今年撮られた実写映画『私の優しくない先輩』を見ました。押井守というアニメ監督もそうですが、アニメの監督さんやＳＦの人というのは実写を撮りたくなるんでしょうね。よく実写も撮られます。そして、『エヴァンゲリオン』の庵野秀明監督も実写を撮りました。どれも私はちょっとコメントを控えたいような作品になっています。もちろん良い悪いは好みの問題ですが。しかし、少なくとも山本寛さんの作品としては、『私の優しくない先輩』という実写映画よりは、『涼宮ハルヒ』シリーズの方が女子高生の高校生活の青春を描いたストーリーとしては優れているように感じました。

つまり、実写にするとちょっと違うことになってしまうということはよくあるんですね。風景もやっぱりそうで、阪神間の風景を、例えば、映画に撮った名作はたくさんあります。古くは『細雪』もあります。その前の映画になるとよく知らないのですが、村上春樹原作、大森一樹監督の『風の歌を聴け』という名作がありますし、また、宮本輝原作の『花の降る午後』というものを同じく大森一樹監督が撮っています。阪神間のきれいな風景を実写で撮った作品としては、平中悠一のデビュー作を映画化した『She's Rain(シーズ・レイン)』もありますし、枚挙にいとまがないというか、きれいな風景を撮っている作品はいくらでもあるんですが、実写の映画で見る風景というのは、やっぱり昔の映画を見ると、ああ、やっぱり昔だなと思うんですね。実写の風景というのは、案外古びます。それはいま自分が実際に見ている風景との落差がものすごくリアルなので、つい古く感じてしまうんですね。でも、アニメは実写ほど古びないというのが私の考えで、例えば、アニメに描かれた風景というのは、実写の風景ほどは古く感じないんですね。それはなぜか。元々が絵ですから、絵を見ているんですから、なぜか古く感じないというのがありまして、そういうところが実写では描けない映像ということを意味しています。

だから、例えば、西宮のきれいな風景を描いた実写映画を撮ろうとしますね。あまり想像したくはありませんが、『涼宮ハルヒの憂鬱』を実写で撮ろうとする変な人が出てきたら

恐いですが、実写で撮ったとしますが、そうすると、もちろんきれいな映像になるんでしょうが、どうしても古びていく。でも、アニメで描かれた西宮の風景というのは、きっと古びないだろうと思います。西宮の魅力をずっと後世に伝える映像になるだろうと思っています。

小説『涼宮ハルヒ』シリーズと、アニメ『涼宮ハルヒ』シリーズは同じ原作でも明らかに別物です。小説でできないことをアニメ版では思う存分やっているということがありますので、アニメ作品の値打ちというのは、そういうところにあるのではないかと私は思います。

さて、どうでしょうか、ワークシートの形ですが、うまいことこういう形になりましたか。

西宮市の市章は六芒星というユダヤ教のダビデの星によく似ているんですが、ググってみると成立は違うそうです。線でつなぐと六芒星になるつもりでつくったのですが、うまくそうならなかったら申しわけありません。そんなわけで、この六芒星の真ん中にちゃんと書く欄があります。ＳＯＳ団西宮支部ということで、西宮と入れておいていただきますと、ＳＯＳ団西宮支部のマークということで、これを広めていただけると西宮市も喜ぶの

ではないかと思っています。ちなみに、ＳＯＳ団というのが何かお知りになりたい方はぜひ『涼宮ハルヒの憂鬱』のＤＶＤをご覧になるか、小説版を読まれるか、あるいは『涼宮ハルヒの消失』の映画はまだ全国あちこちでロングラン上映されていますので、もし近くで上映されたときにはご覧ください。

　そんなわけで、「アニメ『涼宮ハルヒ』 の聖地と西宮」ということで、これで少しでも魅力の一端をお伝えできていればと思います。こちらにアンケートをご用意しておりますので、ぜひご記入いただきたいと思います。西宮文学案内のシリーズは実は今年始まったばかりです。これを継続的に続いていけばいいなと、個人的に勝手に思っていますが、ぜひ次はこんなことを取りあげてほしいというご希望があればお書きください。参考にさせていただきます。

　では、このあたりで私からの話は終わりますが、若干、質疑応答の時間を設けたいと思います。もし質問があれば、２名、３名の方と思っていますが、何かありますか。ちなみにビギナーですので、あまりコアなご質問にはとても答えられませんが。

〇会場１　貴重なお話をありがとうございました。一番好きなキャラクターは誰ですか。

〇土居　もちろん涼宮ハルヒです。

〇会場１　私は長門有希が好きです。

〇土居　ああ、ありがとうございます。よかった、同じじゃなくて。そういうのは結構、語り出すと長くなりますので。ほかにご質問はありますでしょうか。

〇会場２　大変面白かったです。ありがとうございます。マニアックなというか、すごく個人的なお話をお聞きしたいのですが、先生は学生のころにアニメを専攻されたとか、勉強されたということでは一切なく、この講演のためにちょっと勉強されたということでしょうか。私はアニメーションのところに属しているんですが、この西宮文学案内に３回参加しているのですが、こんなことを言うと申しわけないような空気ですが、３回目だけち

ょっと客層が違うので、１回目、２回目にも来られた方にも分かりやすく話されていたように思いますので、かなり勉強されたのでしょうか。

〇土居　最初に言いましたように、『涼宮ハルヒ』はビギナーでありますし、アニメに関しては、普通にアニメを見て育ってきた世代であるというぐらいで、特に大学でアニメーションを勉強したわけではありません。アニメ評論というのも、あまり読まなかったですね。最近ちょっと読むようにしています。アニメ評論というのはものすごくたくさん出てきますが、ちょっと付いていけないところがありますので、アニメ評論をそんなにたくさん研究しているわけではありません。

〇会場２　ありがとうございました。

〇土居　そうしましたら、時間が来てしまいましたので、私の話はここで終わりとさせていただきます。本日はどうもご清聴ありがとうございました。

（了）